楓村

アコヤ

楓村に越して来たのは、まだ暑さの残る九月だった。当時小学五年生だった私は、引越しの理由を父の転勤だと教えられていた。けれど先週、引越しの原因は父の転勤ではなく、リストラだったことを村の人に聞かされて驚いた。

村の人が言うには、四十代前半だった父は、必死に職を探して方々を当たってみたらしいが、年齢的にも条件が悪く、なかなか再就職が出来ないでいたらしい。それで遠い親戚の紹介を伝って、この村の工場で働くようになったそうだ。考えてみれば職探しをしていた半年間、父は無職だったのだ。真面目な父が働いていない時期があったなど、いまとなってはとても信じられない。それに内向的な父が、親戚を頼ってまでした職探しは大変だったろう。経済的に不安もあったはずだ。けれど幼かった私には、そんな家の変化など感じることはなかった。きっと私がなにも変わらずに日常を過ごせたのは、父と母の仲のよさと穏やかな性格か幸いしたのかもしれない。

けれど思い返せば、楓村に引っ越して来て間もなく、温厚な母もストレスを感じていたのだろう。それまで不平不満を口に出すこともなかった母が、急に楓村ことを酷く言うようになっていたのだから。

母の愚痴を初めて耳にしたのは、岡沢さんの家へ遊びに行った時の帰り道だった。

岡沢さんの所には、ふたり兄弟がいる。私より四つ上の尚子さんと、弟の守正くんだ。守正くんは私のひとつ上で年も近かったこともあり、この村へ来て一番初めに仲良くなった友人だった。それに一番近い家ということもあり、私がふたりに会いに行って遊んでいた。そしていつも尚子さんに、なにをして遊ぶのかを決めてもらっていた。

子供だった私は、母とは違い、楓村の生活に慣れるのは早かった。引越しで別れた友人たちを懐かしむより、新しい友人たちとの遊びに夢中になっていたのだから。

母の愚痴を始めて聞いたその日も、時間を忘れて遊んでいただけだっ

た。東京に住んでいた頃もよくあったことだ。けれど母にしてみれば、帰る約束をしていた時間を少し過ぎていただけでも心配になっていたのだろう。季的にも、暗くなるのが早くなった頃で、余計に気が焦っていたのかもしれない。母はその日、岡沢さんの家まで迎えに来てくれ、私を見つけるなり手を強く握った。そしておばさんに軽く挨拶をして、私の手を引いて帰ったのだった。私は遊びの途中で急に帰ることになり、尚子さんと守正くんに決まりの悪さを感じながらも、街灯の少ない薄暗い田んぼ道を力強く握られた手に引きずられながら歩いていた。母はどこか急ぎ足で無言だった。聞こえるのは、風にそよぐ草の音と虫の鳴き声だけだった。そして母はうっとうしそうに、肩に飛んで来た小さな虫を手で払いのけて言った。

「夜が暗くて、虫の鳴き声しか聞こえない所なんて、最悪ね」

ぼそっと言った一言だったが、母の意外な一面を見た気がして衝撃的だった。

昔から母は、虫が苦手だった。だから特に、虫には神経質だったのだ。家の中に大きな蛾が入って来た時など、大騒ぎをしていたのだから。全身に鳥肌を立て、悲鳴をあげていた。そして父に蛾を外に追い出すように頼んでいる声はヒステリックだった。でも父は、都会暮らしが長かったのに、不慣れな所に連れて来てしまったことを済まないと思っていたようだ。引越しをしたことを常に謝っていたのだから。

楓村に来てから一ヶ月くらい経った頃だったろうか。母は虫に対してだけではなく、田舎暮らしにも神経質になっていた。暗闇も嫌いだったようだ。

そしてついには、日に日におかしなことを言うようになってしまったのだ。

ある日の夜、夕食を済ませてくつろいでいる時だった。私と父はテレビのクイズ番組を観て答えを考えていた。けれど母は、ずっと窓の方を向いていたままで、テレビは見ていなかった。すると、テレビのコマー

シャルに入った途端、母は待っていたかのように言った。
「ねえ、あそこにいるのは、誰？」
母は、暗闇を睨んでいるようだった。
「えっ？　どこ？」
父は席を立ち、窓を開けて確認した。
「あそこよ」
庭の隅を指差して母は言った。
「どこにも人なんていないよ」
父は呆れた様子で答えていた。
「いたわよ。あの木の陰に」
私も覗いてみたけれど、誰かがいるようには思えなかった。
それから母は毎日、目を凝らして暗い庭を見ては、誰かがいると繰り返し言っていた。
「あの人が、私を監視しているのね。気持ち悪い。この村はおかしいわ」

そんなことを言う母を見ているだけで、私は辛かった。
そもそも楓村は、いい人ばかりだった。みんな親しみやすく、誰もがやさしく話し掛けてくれたのだから。けれど母には、楓村の生活が苦痛になっていたのだろう。とうとう外に出掛けることもなくなり、寝込むようになってしまったのだから。
楓村の人たちはそんな母を気の毒に思い、外に出るきっかけを考えてくれたそうだ。村の人たちはたくさんの案を出し合ったそうだ。そしてひとつの案として、母を小中学校の音楽の特別非常勤講師として働いてもらうのはどうかというものがあった。母は音楽大学を卒業しているので、ピアノが弾けて歌も上手なのだ。村の人たちは、それを父に聞いたのだろう。村の人は、父にその案を伝えると、すぐに気に入ったそうだ。それしかないと思った父は、熱心に母を説得したそうだ。気分が変わるだろうから、一ヶ月に一度でもいいから行ってみたらどうだと。誘い続ける父に、断るのが億劫になって行ったのか、母は気が進まないようだっ

たが、話を受けることにしたのだった。こうして母は、村でひとつの私も通っている学校の講師になったのだ。

講師として週に一度働くようになってからは、母は徐々におかしなことを言わなくなった。それどころか東京に住んでいた時より、生き生きとして見えた。

私は、講師として働く母が、自慢だった。母の授業は楽しく、教室が和やかな雰囲気になるのが好きだった。それになにより自慢だったのは、みんなが母を好きだったことだ。小中学校合わせて生徒数は、おおよそ三十人。その三十人全員が、母のことが大好きだったのだ。授業が終われば、母の周りにみんな集まって来ていた。誰かが質問すれば、それをやさしく丁寧に母が答えるのだった。大概、熱烈に質問をするのは、中学生の女の子だった。質問の内容は、恋愛やファッションなど女性らしいものが多かった。女の子はみんな、母に憧れていたのだ。それは母が綺麗だったからだと思う。きっと誰もが認める、村一番の美人だったの

だから。おそらく村の人は、母より美しい人を見たことはないだろう。

こんなことがあった。母は、伸びて邪魔になった髪を普通の髪留め用のゴムを使って結わいていた。色はエンジだった。そのエンジのゴムが、大流行したのだ。エンジのゴムなど使わないと思って、私が母にあげたものが流行ってしまったのだ。ただのエンジのゴムだけれど、母が使うと違って見えてしまうのだ。母は髪を結わかない時は、左腕にエンジのゴムを付けて授業をした。その姿がスタイリッシュに見えたようで、女の子たちはみんな、左腕にエンジ色のゴムを付けるようになっていた。私もみんなと同じように、エンジ色のゴムを買いに行き、左腕にしていた。私は少し反抗をして他の色のゴムを腕にして試してみたこともあった。けれど、結局はエンジが綺麗に思えて仕方なかったので、他の色で試すのを止めた。学校でエンジのゴムが流行っているのは、母も知っていた。母は何度か「こんなゴムが流行るなんて、おかしな話ね」と言い、嬉しそうな顔をしていたのだから。

中学三年までは、村での生活になんの不自由も感じていなかった。だが、その状況が一転する出来事があった。それは、母の妊娠だった。父が四十六才、母が四十才。私には、十五も離れた兄弟が出来たのだ。それは私にとって、とても恥ずかしいことだった。大好きだった父と母に対して、嫌悪感を抱く程になってしまったのだから。身ごもった母を労わる父などは、見てもいられなかった。

それからと言うもの私は、父と母から離れるように、週末を外で過ごすようになっていた。よく遊んでいたのは、守正くんだった。高校生になった守正くんは、隣町の学校に通うようになり、平日に会うことはなかった。だから、一週間の報告を兼ねて会うことが楽しみになっていた。私は守正くんの話す隣町の話に、胸を弾ませていた。

その頃、私たちだけの間で流行っていたものがあった。それはどうと言うことのない、押し花作りだった。ただ会うのではなく、先週の続き

の作業が出来る押し花作りが丁度よかったのかもしれない。一週間で押し花を作成しておき、次に会う時はそれをしおりやシールにしていた。私たちは会うと必ず、まず押し花用の花を取りに、村にあるふたつの山のどちらかに行くのだった。

　するとおかしなことに、ここで人に出会すはずもないという場所で、誰かに会うことが多くなって行った。守正くんは普段人通りの少ない山道を選んで、珍しい植物を見つけようとしていたので、村の人たちに出会すことが不思議だったのだ。ふたりで山を歩くようになった当初は、村の人たちに会うことなどなかったのだから。けれど毎週、山へ登る度に、誰かに会う頻度が増えて行くのだ。もちろんすれ違う人は顔なじみなのだから、挨拶はしていた。でもそれは次第に、すれ違うだけではなくなっていた。遠くからなにかをするわけではなく、私たちの歩く方を見ているだけの村の人たちが現れて来たのだ。私は薄気味悪くって仕方なかった。思い過ごしであって欲しと願ったが、どう考えても不自然だっ

た。こちらを見ている村の人に目を向けると、木の陰に隠れてしまうのだから。それは昔母が「私を監視しているのね」と言っていたことを思い出させた。そして、一度疑ってしまえば、そう見えてしまうものだ。

山に登るようになってから、二ヶ月が過ぎた頃だったろうか。ふたり並んで通るのは難しい程の狭い山道で、村の人とすれ違うと、私は勇気を出して守正くんに聞いてみた。

「この村の人は、私たちを監視しているの？」

守正くんは、私の顔を見ず、下を向いて言った。

「そうみたいだね」

守正くんもそう思っていたことに、私は安心した。母のようにおかしなことを言う人だと思われたくはなかったのだ。

それからもずっと私たちの監視は続いていた。私たちの対策としては、山道で村の人に会うと、必要なまでになぜここに来たのかを訪ねるようにした。おそらく村の人たちは、私たちが気づいていると分かっていた

だろう。それでも、監視を止める気配はなかった。人数を減らしては、続けていたのだから。

きっとこの村にはなにかあるのだ。私たちはそう思い、村での生活を苦痛に感じていた。そして守正くんは、私に約束をしてくれた。こんな村を出て、一緒に暮らそうと。守正くんは、親が文句を言わないような、偏差値の高い東京の大学を目指すと言っていた。そして私に、ひとり暮らしをしたら、東京に逃げて来るようにと言ってくれた。

その約束をしてから二年半が経つ。守正くんは希望していた大学に合格し、この春から東京に住んでいる。私はと言うと、まだ楓村にいる。守正くんとは離れてしまったが、メールや電話をしていて関係が途切れるということはなさそうだ。そして私は来年、守正くんの後を追うようにして、楓村を出るつもりだ。東京の専門学校に通うことにしたのだ。守正くんと同棲するのは、それからでも遅くないと思ったのだ。

でもあの時程、この村から出たいという気持ちはなくなってしまった。それどころか、もうしばらくここで暮らしていたいと思っている。私は心変わりをしてしまったのだ。

きっかけは、来月この楓村に、親子が引っ越して来ると知ってからだ。その親子というのは、離婚して間もない二十代の女性と三歳になる男の子だ。もう村の人たちは大騒ぎをしている。みんな興味津々なのだ。特に若い男性たちは異常な盛り上がりをしている。誰が親子の庭で監視をするのかと言い争いが絶えないのだから。先週も殴り合いの喧嘩があったようだ。私だって監視をしてみたいと思っているのだから、男性たちが喧嘩するのも分からないでもない。私はその喧嘩があったことで、女性たちの監視の頻度が多くなることを願っていたりもする。

この世に、これ以上の娯楽があるのだろうか。誰かがなにかしたという情報を人に伝える時の快感。そして、誰かの新しい情報を耳にした時

の興奮。

いま私は、東京行きさえも考えてしまう。それに、監視される喜びは、まだ味わったばかりなのだから。